伊太利ところ〴〵（十四）

瀧川規一

【ポムペイの壁畫】ポムペイの壁畫を見ることが普通旅客の唯一の目的であると云つてもよい程に喧しく世間に取沙汰されてゐる。然るに漫然とそれをポムペイに求めて失望する者が尠くない。若し壁畫に興味をもつ者ならば必ずナポリの博物館を訪れなければならぬ。目星しいポムペイの壁畫は悉く博物館に收藏されてゐるからである。法隆寺の壁畫の色と線とそれが構成する崇高なる影像とに無限の興味を感ずる程の者ならば必ずポムペイの壁畫にも相當の興味を感ずる。法隆寺の壁畫は性質上超人的であるが見方によつては超時代的な人間性をも表現してゐる。神像を描かんと欲して却つて人間像を描き、甚しきは自畫像を描くことは往々畫家の經驗する處である。然し自然に即して且つ自然を離れ、人間に即して人間を離れた處に無限の興を感ずる。これは法隆寺の壁畫を見た時の現筆者の個人的感興である。世間には種々な理窟を捏ね、捏ね上げた末、結局は元に還つて、人間のなし得る説明及び解説に滿足せずして超理性的な無條件讃仰に餘念なき人がある。これも強ち（アナガ）に咎む可きことではない。時には然る可き時もある。今ポムペイの壁畫を見る時は法隆寺の壁畫を見た時の「超自然即人間」と云つたやうな幻妙幽玄な感じは少しも起らなかつた。時代の超越感はある。それもその筈である。紀元前二世紀から紀元後一世紀間に至る略三百年のものであつて、今日からは二千年以前のものであるからである。然したとへ畫題を古典の神話にとつてあつても、法隆寺の壁畫の感じとは全

く異つて、ポムペイの壁畫はどこまでも「人間即人間」の感じがある。「人間即人間」と云ふやうな六つかしい漢字を連ねる必要がどこにあるか。この稿を書きながら自分もさう思つたが他にこの感じを適切に云ひ現はす言葉が容易に見つからない。然し斯うした場合何とか總括的に自己の印象を云ひたい感じがするのは止むを得ない。ポムペイの壁畫は徹頭徹尾、人間味を離れないことである。秘中の秘畫に至つてはエロ、グロの一大パノラマである。これ丈けを見んが爲めに漫然と足をポムペイに運んで、失望する人もある。而かも幾多の手續を經て漸く見るを許される人の中には婦人が多いと云ふ。旅行談をすれば必ず話を其處に終らしめなければ物足らぬ顏を見せる輩は先づ六つかしい手續を經てナポリでこれを見、次にポムペイに於てその殘物を見るがよい。

ポムペイの壁畫及び壁の裝飾は建築物と同じく四期に別つて考察するのが便利である。

第一期は紀元前二〇〇年から八〇年に至る間に作られたものであつて、年代から云へばポムペイの建築の第三期に屬する。この期の壁の裝飾は單に色壁に過ぎない。屋壁が大理石の板で蔽はれた大形の石材で作られたと云ふ印象を與へる爲めに工夫を凝らしてゐる。今日吾邦で鐵筋コンクリートの建物が大形の扁石や太柱で作られてゐるやうな外形を見せる爲めに裝飾を壁に作ると同じ趣向である。時代色のついてゐることが先入主の美感と相俟つてよい感じを與へる。コンクリートの家を建てるならば壁の裝飾としてこれを取捨應用すればよいがと思つた。

第一期の最も上出來のものを擧げるならば第一にサラスチアスの家（Casa di Sallustio）にある壁の裝飾である。この家そのものが一風變つてゐる。他の住家には列柱廊(peristilio)があるのにこの家丈けが全く無いのである。破屋の內部の有樣を見ると、日本向きのする家である雨受けの水溜があつて方形の框石の上に現代式の美しい彫刻の坐像があるかと思つて近よつて顏を覗いて見ると、坐像は生きた血と肉のある

坐像であつた。中央の空地(atrium)の周圍には小室がいくつもあり副空地(tablinum)の左側の室に本例として擧ぐべき第一期の壁の裝飾がある。一本の柱が物淋しげに立つてゐる處は食堂の名殘りである。この家は度々增築改築を加へられたらしく水溜の右手の小廻廊の壁にはダイアナとアクテオン(Diana : Actaeon)の畫がある。その右手にはフリキサス(Phrixus)とヘレ(Helle)の畫があり、左手にはユーロパ(Europa)が雄牛に跨つてゐる畫がある。左側の小食堂にはマース(Mars)とヴイナス(Venus)の畫があり下手にはパリス(Paris)とヘレナ(Helena)の畫がある。以上の壁畫は後に述べる第四期に屬するものである。敷石と壁の腰は大理石の薄板を蔽うてある。この室では發掘の際靑銅の小立像と黃金の壺と、ヴエスパシアヌス(Vespasianus)皇帝時代の金貨銅貨とが見出されたと云ふ。

その他の例は既述のバシリカ(basilica)にあるもの、アポロの殿堂にあるもの、カサ・デル・フアウノ(Casa del fauno)にあるものである

第二期(紀元前八〇年より同じく三〇年)に入ると透視遠近法を利用して居り、室を實際よりも大きく見せる工夫をしてゐる。構圖も題目も種々樣々であるが、大體に於て寫實的であり建築的な構圖である。

その例として擧ぐべきは「迷路の家」(Casa del labirinto)にあるもの、「神秘の家」(Casa dei misteri)にあるものがそれである。

「神秘の家」はポムペイ行をして意義あらしめるもの〻一である。グランド・ホテル・スイセ(Grand Hotel Suisse)の所有主であるアウレリオ・イテム(Aurelio Item)が政府の許可を得て一九〇九年の四月から翌年の初頃まで發掘今は政府のものとなつてゐる。この家は帝政時代の初期に建てられ火山爆發當時は改築中であつたらしく從つてその當時は人が家に住んでゐなかつた。西側の居室の列にある壁には第二期の壁畫が澤山ある。客間に入るとデオニサス(Dionysus)の神の神秘の儀式を描いてゐる。この

家を「神秘の家」と命名せしめたのはこの繪の爲めである。

ヂオニソスの神は萬人周知の如く酒及び酒造の神様である。ジュピタ（Juppiter）とセミール（Semele）の間に生れ、初はニンフ（Nymphs）によつて育てられ、後にはパン（Pan）の子シレナス（Silenus）の群やニンフの群と共にパンのお伴をして諸國を巡り人間に葡萄栽培と葡萄酒釀造法とを敎へた。テーベス（Thebes）の王ペンテウス（Pentheus）がヂオニソスを歡迎しなかつたので、神は怒つて王の母アガウエ（Agaue）及び他のテーベスの婦人達を狂暴性な氣狂に變へた。暴れ狂ふ婦人達は遂に國王を野獸と見誤つて殺戮した。ナクソス（Naxos）島に渡る途中でヂオニソスは海賊船に出會して、海賊等はヂオニソスを襲うて之を鎖に繫いだ。然るに鎖は切れて船は蔦や葡萄の蔓で一體に蔽はれ進航することが出來なくなつた。海賊等は驚愕の餘り船外に身を投じたが、神の怒未だ解けず海賊等は忽ち海豚に化した。

ナクソス島に渡ると一人の美しき婦人が海岸に眠つてゐるのをヂオニソスは見出した。この美婦は元クリート島（Crete）の王様の娘であつて、クリートの迷路中に住む半人半牛の怪物ミノタウロス（minotauros）を殺す爲めにアゼンスから渡來したセシアス（Theseus）と戀仲となり遂にこの婦人の援助によりてセシアスは目的を達した。セシアスは共に手を携へてアゼンスに歸る途中このナクソスの島で不義理にもこの婦人を棄て去つたのである。婦人の名をアリアドネ（Ariadne）と云ふ。離れ小島に棄てられ途方に暮れて眠つてゐた處をヂオニソスに發見されたのである。ヂオニソスは彼女と直に結婚した。

ヂオニソスが身につけてゐるものはシルサス（thyrsus）と呼ばるゝ杖（ツエ）、大杯、獸の皮、鉢卷の布、葡萄の房、及び蔦である。お伴には獅子虎、豹、牡山羊が居る。

今神秘の家にあつてこの神の神秘の儀式を婦人がはじめて敎へられる處を壁畫で見るのであ

る。壁の全長四四呎と云ふ長いものである。壁には下から上へと層をなす種々の色の太い水平線がある。第一線は帶赤褐色であり次は綠、次は黑、次は帶赤色の横線をもつ帶黃色であり、次は黑、綠、ライラック色、綠の順になつてゐる。この色の調和がよくとれて居る。その上に繪そのものゝ輪廓がある。入口の左側から畫が始つてゐる。描かれた人物は何れも等身大である。背景たる地の色はヴアミリオン色であり繪の內の裾は薄灰色の綠である。繪と繪との間には黃金色の縱線がある。繪の上部にも亦迷路を構圖にしたやうな緣がある。次に種々の色の構造大理石があり赤緣をもつ四角の隔がある。この模造代理石の上には綠の花輪をあしらつてある。繪の內の婦人の服裝の色はライラック色か黃金色である。

入口の左手の第一圖から始まる。一人の裸體の小兒が卷物を兩手に擴げて何か知ら讀んで居る。見るからこの小供は局部を除いて他は女兒の體格である。そんな點から推してこの小供はハーマフロダイト（Hermaphrodite）ではないかと想像されてゐる。ヘルメス（Hermes）とヴイナスとの間に生れた女身をもつ男兒がハーマフロダイトである。この小兒は二人の婦人に神秘の儀式に入る時の規則を讀み聞かして居るのである。

一人の婦人は立つて左手にヴェールを手ぐり右手を腰にあてゝゐる。他の婦人は坐つてゐる

坐つてゐる婦人の右側に蔦蔓の冠らしきものを頭に頂き皿を捧げて持つてゐる。皿の上には何か知ら盛られてある。兩腕は全く裸出し兩の手首には腕輪をつけてゐる。今日夜會に見る西洋婦人のやうである。これは尼さんである。この尼さんが進み行く前方には三人の婦人が塊つて集つてゐる。中央に坐つて背を見せて居るのは尼僧でありその兩側に立つてゐるのは二人の婦人の召使である。彼等三人はこれから何か象徵的に仕草をしようと云ふのである。この背向けの尼僧の右手には高い三脚臺の上に皿がある皿のうちには聖水がある、尼僧は聖物を右手に

持つて居り、立てる一人の召使は壺から聖液をその聖物の上に注いでゐる。この聖物の形は尼僧の右手に握られてゐるので繪では判斷出來ないが、尼僧の握つてゐる手の形から推して略それが何であるか想像がつく。尼僧の左手から一人の召使が中腰になり皿を捧げて居り、尼僧は左手で皿の蔽布を摘み上げてゐる。この布で聖物を包まんとするのである。尼僧が背を向けてゐるのは神秘の儀式を俗人の目から避ける爲めであると云はれてゐる。

次に殆ど裸體でその不恰好なデク〳〵肥え太つた身體を圓柱に凭たせ立琴を彈いてゐる者がある。これはヂオニソスを育てたシレナスである。シレナスは何故にこんな無恰好な身體をしてゐるのであるか。それでもヂオニソスに隨つて驢馬で旅行をしたのである。神話によつて彼の體格檢査をして見る。鼻が低く扁平であり、且つ天井向きである。この繪では邦人の低太鼻によく似てゐる。鼓腹鞭々である。豚肥えである。年は中年であり頭は禿げてゐる。脛毛胸毛を長く生やしてゐる。醉心地で驢馬に乘つてゐるが兩方からセイタに支へられてゐる。身につけてゐるものは、酒入れの革袋、葡萄房、杖、蔦蔓である。

壁畫に於てはシレナスの立琴に合はせて一人の牧童はシリンクス（syrinx）と稱する古代樂器を奏してゐる。他の一人の牧童は犧牲の供物となるべき二疋の山羊を手なづけてゐる。この牧童の側で一人の娘がヴェールを右に摑んで高く上げ左手の指を擴げて恐愕の色を顏に見せてゐる。右手の一團の人々から逃げんとする處であるらしい。未だ儀式に入らぬうちに異樣の樣子を窺つて俄に怖氣がついたのであらう。

何を見て斯く驚いたか。蔦の冠をつけた半身裸體のシレヌスは臺の上に腰を下ろしたまゝ兩眼を見開いて逃げる娘の方をにらみつけてゐる兩手で酒壺を持つて居り、一人の若き裸體のセイタがシレナスの背後から、差上げた酒壺の內を覗き込んで居る。これは酒壺によつてトひ（ウラナ）をしてゐるのである。他の若き裸體のセイタは恐

ろしい顔をした假面を片手で差し上げてゐる。この假面は日本の猿樂の假面に似て居り、魔法除けに若きセイタが差し上げて居るのだと云ふ。

次に一人の青年が腰掛けの上に腰を卸ろして上半身を裸體にして兩腕を頭上高く指し延べ誰かの膝肩にもたれ掛つて居る。これが神秘の儀式の主ヂオニソスであり、膝を貸してゐる者はヂオニソスの拾ひの妻アリアドネであるとせられて居る。アリアドネの顔は壁の破損の爲めに見ることが出來ない。只膝から下と兩手をヂオニソスの肩に載せてゐること丈けが判る。神秘の式に參與した婦人の至福の狀態がこゝで描かれてゐたらしいが、破損の爲めに判明しない。

次の繪になると半裸の若き娘が蹲いて兩腕を指し延べ聖の聖なるものをも露はさんとしてゐる。その前には顔をそむけてゐる半裸兩翼の天使らしき婦人が右手で鞭を振り上げて蹲ける娘を今や打ち下ろさんとしてゐる。この繪については說明が區々一致しない。兩翼の女性はヂオニソスの召使長であつて、躓ける女がこの儀式を恐れて尼僧の裾に頭を隱さんとするので懲らしめの鞭を振り上げた處であると云ふのが一說である。他の一說はこの繪は色情催進の目的にする鞭打の光景であるといふ。何れが眞か判明しない。

次の繪になると既に儀式をすました全裸の婦人が兩腕を頭上高く指し上げ背を向けて踊つてゐる。一人の娘は殆ど裸體になつて蹲き一人の尼僧の膝の上に頭をのせ俯下してゐる。尼僧は背を撫でゝ勞はつてゐる。他の一人の尼僧は背後からシルサスの杖を差し出して娘の抵抗を止めてゐると云はれてゐるが實際は尼僧の顔丈けは判明するがその他は一切判明しない。

こゝまで來ると繪は窓の爲めに中絕し窓の右側に最後の光景がある。一人の娘は三脚臺の上に腰を下ろし髮を結うて居りその傍に一人の婦人が立つて居る。兩人の前に小さきキユピッドが兩手をもつて鏡をさし上げて居り鏡には婦人の顔が寫つてゐる、この繪の說明によると髮を結うてゐる婦人は既に儀式を濟まして後に身の

裝ひをしてゐる處であり、立てる婦人はその召使であると云ふ。

次の繪は衣裳豐かに寢臺の上に腰をかけてゐる中年の婦人が今迄の儀式の光景を見てゐる處である。これは尼僧の長である。頭からヴェールが懸つて居り左手の紅差指には指輪をはめてゐる。

これ等の多くの婦人の頭髮は金髮に非らざれば薄茶色であり、眼は何れも全く褐色である。

寢室にはヂオニソスの神に關する光景を描いたらしい壁畫がある。醉へるヂオニソスがシレナスに支へられてゐる場面、プリアパス(Priapus)の神の祭壇に犧牲に供ふべき豚をキユピッドが引ける光景、松明を持てるものがキユピッドの道案内をして祭壇へ急げる光景、王冠を戴ける尼僧が威儀正しく濶歩して腰下まで上半身を裸出せる有樣、異形の顏をして踊れるセータなどがある。

ポムペイの代表的壁畫と云へばこの「神秘の家」の壁畫である。

迷路の家は閉鎖中にて觀覽を許されなかつた

新著紹介

○但馬鄉土誌　藤本亮助著　菊版一三二＋一〇頁　兵庫縣東河村尋常高等小學校發行　二月　非賣品

地質鑛物教育の熱心な主張者である著者藤本君は鄉土教育の論議が高唱せられる時に當つて多年の抱負を具體さすべくこの著を公にして兵庫縣下の鄉土教育に資せられた。自序に於て鄉土の意義を「其の地方の小學校を中心として其附近に於て兒童が自由に往來することが用來直觀し得る所」と定め本文に於て先づ我が鄉土の章を擧げて東河村と其隣町村とを記述してゐる。東河村は年々戶數の減少する傾のある村で、田畑も山林も其三分の一は他村の者の所有となつてゐる（本文には「他村に流れてゐる」と述べてある）。借金總額は約五十五萬圓で預金及び貸金約二十萬圓差引約三十五萬圓の負債があると村の眞狀を述べてあると共に冬の農閑期に灘へ酒造出稼に行き父女工となつて縣下に働くものが少くないのをほめてゐる。我が隣村としては往復數里から十數里の見學遠足に適した道に從つて自然人文を說いてゐる。第二章は準鄉土地方と題して但馬全部の地理を主に主要河川の流域に從つて記述し、第三章は但馬鄉土の總括として各郡につき總括し